

自治体合併による小学校社会科副読本の変化（第2報） —京都府京丹後市の場合—

香川 貴志

Changes in Elementary School Social Studies Supplementary Readers as a Result of Municipal Mergers (Part 2): The Case of Kyotango City, Kyoto Prefecture

Takashi KAGAWA

Accepted June 18, 2025

抄録：いわゆる「平成の大合併」に伴って全国各地で市町村合併が進み、それが地方自治体の初等中等教育に影響をもたらした。その具体例として、本稿と主題を同じくする第1報では、京都府最南端の都市である木津川市において、自治体合併前後の社会科副読本の変化を分析した。そこでは記載内容の選択と強調を確認することができた。本稿は木津川市と姉妹都市の関係にあり、京都府最北端に位置する京丹後市を事例地域として、木津川市と同等の分析と考察を行った。結果として、6町合併で誕生した京丹後市では、大胆な副読本の簡略化が確認できた一方、記載内容の「選択と強調」は木津川市と同様であることが判明した。

索引語：自治体合併、小学校社会科副読本、選択と強調、京丹後市、京都府

Abstract: Municipal mergers in many parts of the country have affected elementary and secondary education in local governments. As a specific example, in the first article in this bulletin, which shares the same theme as this one, the author analyzed changes in social studies supplementary textbooks in Kizugawa City, the southernmost city in Kyoto Prefecture, before and after the municipal merger. In the first article, I analyzed changes in social studies supplementary textbooks in Kizugawa City, the southernmost city in Kyoto Prefecture, before and after the municipality's merger. This study was conducted in Kyotango City, which has a sister-city relationship with Kizugawa City. Kyotango City is located in the northernmost part of Kyoto Prefecture. My analysis and discussion are done on the same approach as Kizugawa City. As a result, Kyotango City, which was created through the merger of six towns, was found to have boldly simplified its supplementary textbook, while the selection and emphasis of the descriptions were similar to that of Kizugawa City.

Key Words: municipal mergers, elementary school social studies supplementary textbook, selection and emphasis, Kyotango City, Kyoto Prefecture

1. はじめに—本研究の目的—

本誌に掲載の木津川市における論考(香川:2025a)と同様、本稿は地方自治体の合併にともなって刷新される小学校社会科副読本(以下では副読本と記載)に着目し、自治体合併前後における副読本の変化を精査したものである。副読本は、小学校第3学年・第4学年(以下では中学年と記載)の社会科で多用する教材なので、記載事項の精選や記載内容の吟味、児童の発達段階に応じたビジュアル性の追求、持ち運びの利便を考慮に入れた頁数の抑制などの多様な条件の下で編集が進められる。このような副読本は、地域固有の特性を理解するには格好の素材となる。内容が地域に根差した部分を多く含むため、初学者向けの地誌学入門書とみなすこともできるだろう。そういう意味では、受験を意識した中学校社会科の地理的分野や高等学校地理歴史科の「地理総合」「地理探究」よりも大学における地理学に近い性格を持っているといえなくもない。

自治体合併やそれに伴う副読本研究の系譜、さらに副読本が編まれる理由については、本誌掲載の香川(2025a)で詳しく述べたので本稿では割愛する。したがって、本稿の末尾に添えた参考文献は近年の京丹後市を扱った地域研究の文献が中心になっている。

本稿の研究目的は、上述した木津川市の事例と同様である。そこで、この論考に記した研究目的を再掲しておきたい。それは「自治体合併前後の副読本を比較考察して記載内容の変化を解明し、当該自治体における地域学習の基礎がいかに関与しているのかを明示のうえ、副読本の有効利用について提案する」というものである。副読本で精査する主な箇所は、地域特性が最も色濃く滲出する「地域開発を扱った章」とする。そこでは近世以降の地域開発史が多く扱われ、それが第6学年における歴史学習の基盤、地理と歴史を融合して考察する基礎作りにも寄与すると考えられる。

本稿における両市の比較では、類似性ととともに相違性も導出されると推察できる。全国には多種多様な条件の下で自治体合併がなされてきたため、このような事例研究を重ねておくことは、将来に生じる自治体合併の際に有益な教材企画・編集の一助となることだろう。

2. 研究対象地域としての京丹後市をめぐる近年の先行研究

京丹後市は、いわゆる平成の大合併が促された際の方策、すなわち合併特別債の発行が可能な期限(2005年3月31日)の約1年前に誕生した。新自治体の発足は2004年4月1日である。母体となった町は図1に示したように3郡6町で、その面積は約501㎢に及ぶ。

相楽郡内の3町(山城町、木津町、加茂町)が合併して2007年3月に誕生した木津川市とは、この点が大きく異なっている。日常生活圏を色濃く反映した郡は、総じて郡内での結束や関係性が強いことが珍しくないため、他郡との合併を円滑に進めることは決して容易ではないはずである。このことを合併特別債の発行期限と併せて考えると、けいはんな文化学術研究都市に内包される木津川市と比べて財政基盤が決して強くない京丹後市は、ある種の危機感をもって自治体合併を急いだとも解釈できるだろう。

合併に参加した町は、中郡の峰山町(市町村コード:26481)と大宮町(同:26482)、竹野郡の網野町(同:26501)と丹後町(同:26502)と弥栄町(同:26503)、熊野郡の久美浜町(同:

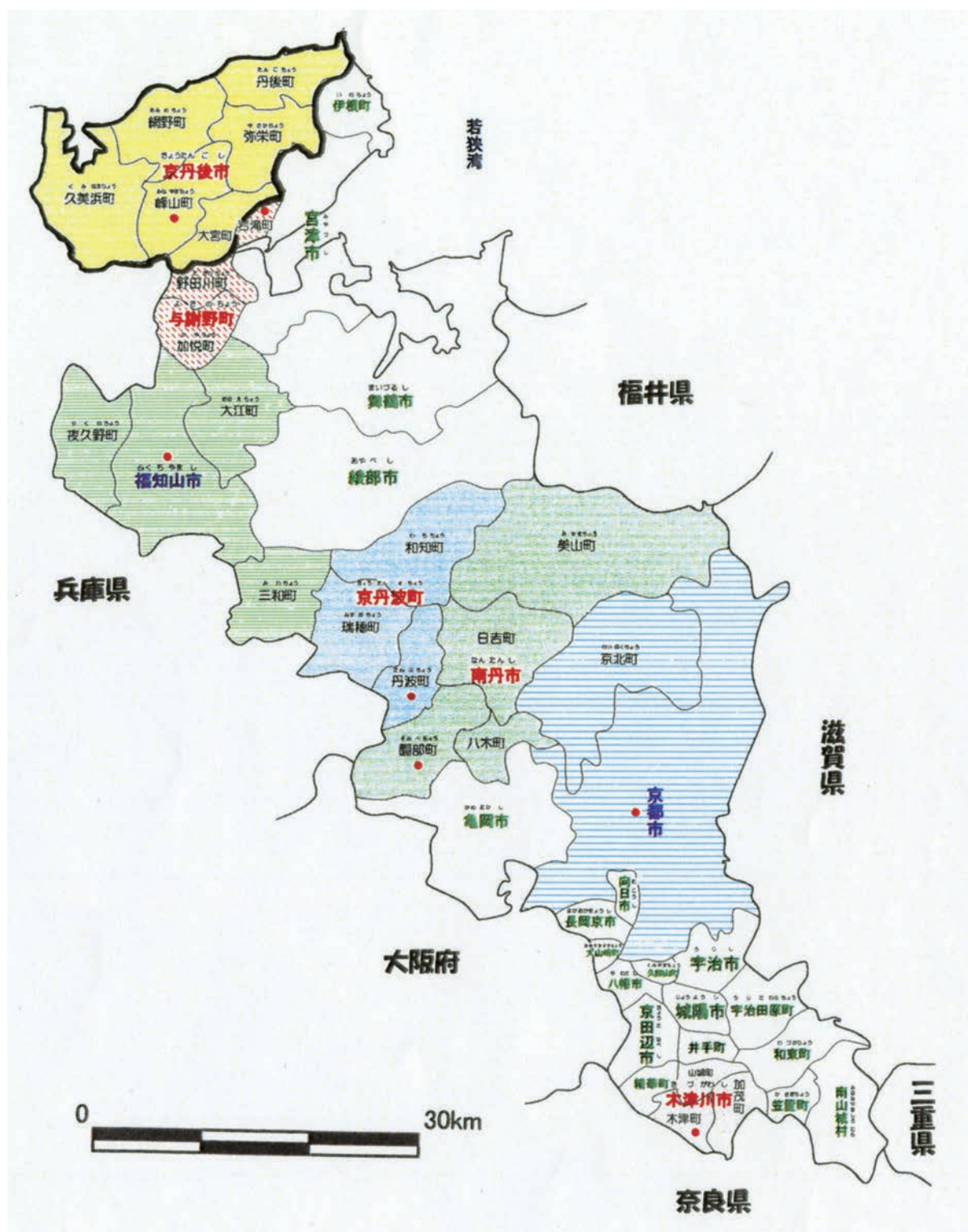


図1 京都府の2003（平成15）年以降における自治体合併状況

市町村界に太線を施した府北部の自治体が6町合併で誕生した京丹波市
 （国土交通省国土地理院（2025）全国都道府県別・市町村合併一覧図の京都府の頁）

26521)である。久美浜町は全国的にみても珍しい1郡1町であったが、これには同町が明治政府による廃藩置県の際、現存しない久美浜県の県庁所在地であったことと無関係ではない。久美浜県は、旧国名でいえば丹後・丹波・但馬・播磨・美作それぞれの一部を統括した行政単位で、現在の都道府県でみると、その行政範囲は京都府・兵庫県・岡山県に及んでいた。本稿では次章以降において旧町の副読本を列挙する際、上述した市町村コード番号の昇順で配列する。

このように複数の郡が合併して誕生したこともあり、京丹後市では新しい行政域を包括的に捉え、環境保全や防災対策、市役所の機能の分散配置（多極分散型行政域の形成）や公共交通政策などで独特の取組みがなされている。まず環境保全に関しては、友野（2008）が丹後地方の自然を代表する琴引浜が観光資源としてどれだけの経済効果を生み出すのかを試算し、周遊型観光ルートへの取り込みが経済効果を高めることを指摘した。ただ、京丹後市域は1927年の北丹後地震で甚大な被害を受けた過去があり、植村（2012）は後背湿地が卓越する旧峰山地区で地震対策を強化しておく必要性を訴えた。丹後半島の山間集落は総じて北丹後地震や1963年の三八豪雪が契機となって衰退したといわれてきたが、坂口（2022、2023）は労働環境や交通環境の変化の影響が捨てきれないと指摘した。他方、中山間地域の離村集落のなかには旧丹後町の力石集落のようにモニュメントを建立し、それを拠り所にして文化や歴史の継承を未来へ向けて図っていくとする事例も報告されている（小山：2023）。

また、行政域が広く高齢者の比率が高い地域特性から、高齢者にもフレンドリーな情報化促進への取組みが複数の研究者によって報告されている。田畑（2013）はローカル情報の提供の活発化を図るためのCATV普及の取組みやコミュニティFM局の開局が地域活性化に貢献していることを示した。衛藤（2019）はICTを活用したオンデマンド交通においてクレジットカードを持たない高齢者が現金で支払えるようにした制度改革を好意的に評価した。ここで扱われたオンデマンド交通は、高橋ほか（2017）や野村（2020a、2020b）では一層具体的に「ささえ合い交通」という有償自家用車輸送が全国的にみても先駆けであると紹介された。「ささえ合い交通」の本格的なスタートは2016年であり、利用しやすいよう年々改善が重ねられてきた。

上述した高橋ほか（2017）は「ささえ合い交通」よりも6年早い2010年に運用開始された上限200円バスについても言及している。多機能分散型の都市構造を持つ京丹後市では運転免許を返納した高齢者や高校生の移動手段の確保が喫緊の課題であり、まずは既存のバス路線の再編を図る中で上限運賃200円という方策が実施された。その導入当初の滑り出しが好調で、乗客が増加した。一方で補助金支出の負担増は大きくなったことが新子（2010）によって示されている。上限200円バスと同様の試みは香川県小豆島（土庄町と小豆島町）でも上限300円バスとして実施されている（香川：2025b）。多機能分散型で高齢者の比率が高い地域特性は京丹後市と小豆島に共通する地域特性である。

さらに、京丹後市を含む丹後半島を対象とした大学でのフィールドワーク実践について、その事前学習と現地での授業が香川（2023a、2023b）によってまとめられている。

3. 京丹後市発足前後の副読本の諸元について

本章では、前章で触れた京丹後市発足前後に発行された、各町最後の副読本と京丹後市発足後

初期の副読本の諸元を概説する。京丹後市の副読本については、2007年発行の初版を入手できなかったため、本稿ではその改訂版である2010年発行の副読本を使用した。各町の配列は、前章の記載に準じて旧町の市町村コード順とする。具体的には、旧峰山町（市町村コード26481、以下はコードのみ記載）、大宮町（26482）、網野町（26501）、丹後町（26502）弥栄町（26503）、久美浜町（26521）となる。自治体合併で誕生した京丹後市については、久美浜町に続けて記す。

各々の副読本の内容を述べる際、著作権の関係から記事や写真、グラフ・統計類は著作権の関係で不用意に転載できないので、副読本をテーマにした先行研究と同じく単純な転載は努めて避けた。合併前の各町で発行された旧町で最後の副読本、京丹後市になってから微細な改訂を経て2010年発行の副読本、表紙デザインが改められた2011年の副読本の表紙を図2に示した（峰山町教育委員会：2002、大宮町教育委員会：2002、網野町教育委員会：2002、丹後町教育委員会：2003、弥栄町教育委員会：2003、久美浜町教育委員会：2000、京丹後市教育委員会：2010、2011）。

各町最後の副読本および京丹後市の初期の改訂版副読本の諸元は表1に整理した。本章(1)～(6)で各町の副読本の特徴を述べ、京丹後市の副読本については(7)で述べる。その際に表1と照合することによって、各々の副読本を比較することができる。なお、本章(1)～(7)において「第○章」と記す場合は、各々の自治体が発行した副読本における章番号を指している。

(1) 旧峰山町の副読本の特徴

旧峰山町の副読本『わたしたちの峰山町』は、峰山町役場（現在の京丹後市役所本庁舎）とその周辺市街地を撮影した斜め空中写真が表紙を飾っている。自治体合併後の京丹後市の市役所本庁舎が置かれていることから推察できるように、峰山市街地は古くから丹後半島北部地域の中心として機能してきた。このことを踏まえると、地域中心としての誇りが表紙デザインに反映されているとみなせよう。

旧峰山町の副読本は6章からなる。小学校中学年についての学習指導要領に準拠していることはいままでのまもない。同町の副読本の大きな特徴は、他の5町に比べて地域開発に関わる章の構成比が高いことである。旧6町全てで重視されている農業水利だけでなく、郷土の発展に尽くした地元の偉人の扱いがあること、さらに近現代史を扱う中で1927年に発生した北丹後地震（副読本では「丹後大震災」と記載）や1963年の三八豪雪などの自然災害に関する記述が相対的に詳しいことが第5章のウエイトを高める大きな要因として働いている。

他の章では、地誌的内容の第1章において手作り感に溢れた手描き地図が多用されていることに好感が持てる。これは別稿（香川：2025a）で扱った旧木津町や旧加茂町の手描き土地利用図とともに、児童にとって親しみやすい教材となるだろう。第2章から第4章は、一部に地誌的な箇所もある一方、一般論的・匿名的な部分が大勢を占める。京都府全域を扱った第6章は、府内の各自治体が発行している副読本と大差のない仕上がりである。

(2) 旧大宮町の副読本の特徴

旧大宮町の副読本『わたしたちの大宮町』は、内陸部に位置する大宮の特徴を反映して町内で普遍的にみられる落葉広葉樹の林があらわれている。町内の豊かな自然環境が感じられる国語教科書の表紙のように端正なデザインである。地誌的な内容の第1章で手描き地図が多用



図2 各自治体の教育委員会が編集・発行した小学校社会科副読本の表紙

- 上段左から1番目：峰山町教育委員会編（2003）『わたしたちの峰山町』
 上段左から2番目：大宮町教育委員会編（2002）『わたしたちの大宮町』
 上段左から3番目：網野町教育委員会編（2002）『わたしたちの網野町』
 上段左から4番目：丹後町教育委員会編（2003）『わたしたちの丹後町』
 下段左から1番目：弥栄町教育委員会編（2003）『わたしたちの町・やさか』
 下段左から2番目：久美浜町教育委員会編（2000）『わたしたちのまち 久美浜町』
 下段左から3番目：京丹後市教育委員会編（2010）『わたしたちの きょうたんご』
 下段左から4番目：京丹後市教育委員会編（2011）『わたしたちの きょうたんご』
 （京丹後市教育委員会の許諾を得て上記の小学校社会科副読本の表紙を転載）

されているのは、峰山町にも共通するものである。

大宮町の副読本の特徴として、自らの自治体を含む都道府県（大宮町の場合は京都府）に関わる章が設けられていないことを指摘できる。自治体合併前に町内の小学生へ通学していたという宿泊業従業員と商店経営者の方に何うと、ともに「京都府全体についての授業はあったように記憶している」旨の話が得られた。したがって、何らかの補助教材を使って授業が構成されたのかもしれない。ただ、この件に関しては本稿執筆時点で確証が得られていない。

こうしたこともあり、地域開発に関わる章が最終章である第7章に配置されている。第7章は2つの節からなり、1節が農業用水関係で2節が河川改修（洪水対策）を扱っている。これらのうち1節が7頁、2節は僅か2頁なので、旧大宮町において農業の果たす役割の大きさを

うかがい知ることができる。一方、第4章では工業と農業が扱われているが、前者に9頁が割かれているのに対し、後者に割り当てられているのは工業の半分にも満たない4頁だけである。工業のウエイトが高いのは、衰退したとはいえ地域外でも著名な丹後ちりめんの生産にスポットが当てられているからだろう。

（3）旧網野町の副読本の特徴

鳴き砂で知られる琴引浜が著名な旧網野町の副読本『わたしたちの網野町』は、表紙に同地のイメージに符合する、海岸沿いを屈曲しつつ敷設された道路の写真が掲載されている。琴引浜は美しい一方で、表紙写真としては単純な構図になりやすいので表紙写真としてインパクトに欠けるのかもしれない。裏表紙に4点ある写真のうちの1点は琴引浜を素材にした写真で、自然環境に対する同町のこだわりが垣間みえる。

章構成はオーソドックスな6章構成であり、各章のプロポーシオンにも特異な点はない。地誌的内容の第1章の手描き地図は、中郡の2町と同様で手作り感に溢れた仕上がりが好ましい。全体を通じて漢字が多用されている一方で丁寧なルビが添えられている。

地域開発に関わる第5章では、台地の水不足解消のための用水建設や洪水対策の河川改修が扱われている。古くから豪雨時の竹野川氾濫に悩まされてきた地域なので、用水建設よりも河川改修の扱いに力点が置かれている印象を受ける。また、新旧の地形図から地域変化を読む箇所があるのも特徴的である。中学年児童には少し難しいかもしれないが、どういう部分が市街地なのかを認識できるように上手く指導できれば、早期から読図力に優れた児童が育つかも说不定。1927年に発生した北丹後地震（副読本では峰山町のそれと同様に丹後大震災と記載）や1963年の三八豪雪に言及していることは、丹後半島の中では相対的に大きな市街地を有していた地域特性の証左だろう。

（4）旧丹後町の副読本の特徴

丹後半島の旧自治体の中でも有数の海岸線長をもつ旧丹後町の副読本『わたしたちの丹後町』の表紙には、町内の間人（たいざ）にある後ヶ浜（のちがはま）に設置された間人皇女（穴穂部間人皇女＝あなほべのはしひとのひめみこ）と聖徳太子の母子像の写真が印象的なアングルで取り込まれている。この間人皇女にちなんで全国的にみても難読地名として知られる間人という集落名が付けられたと伝えられている。

旧丹後町の副読本は、地誌的な第1章の記述において空中写真と地形図が積極的に使われていることだろう。空中写真は、斜め空中写真を使っている地区と垂直空中写真を使っている地区があるため、中学年児童には少し難しいかもしれない。学校周辺については、中学年児童が使いやすいような手描き地図が添えられており、児童が楽しみながら学べるだろう。

地域開発に関する第5章では、町内の灌漑に大きな役割を果たした尾和用水が詳しく取り上げられている。ここで注目すべきは過去の開発経緯のみならず、現代におけるメンテナンスにまで言及していることである。この視座は、歴史を過去のものとしてせず現代が歴史の上に成り立っていて、それが未来へ継承されていくことを学ばせる方法として優れている。第5章において、北丹後地震（旧丹後町の副読本では奥丹後震災と記載）や三八豪雪に触れていることも防災・減災の見地から有効であろう。

(5) 旧弥栄町の副読本の特徴

旧弥栄町の副読本『わたしたちの町・やさか』の表紙には、町内の山林を背景にして、町役場と水田の写真が各1枚、文化関連の写真が2枚あしらわれている。自治体合併前に町役場だった建物は、合併後に京丹後市役所弥栄支所となったが、地域の行政的な拠点であることに変わりはなく町内では誰もが知る建物である。

旧弥栄町の副読本を特徴付けているのは、地誌的な第1章で解像度の高い垂直空中写真と1/2,500 国土基本図に準ずるような正確な地図が積極的に用いられている点であろう。その一方で、中学年児童が親しみを覚えやすいような手描き地図は多くない。垂直空中写真と地図の照合は中学年児童にとっては少し難しいかもしれないが、Google Maps で地図と衛星写真の照合

表1 京丹後市発足前後に発行された小学校社会科副読本の諸元

自治体/書名	発行年	判型/割付	総頁数 1)	印刷 2)	編集委員数 3)
	2003	B5/横組	116	白黒	10
峰山町	1	わたしのまち みんなのまち.....	1	(26p., 22.4%)	
	2	ひとびとのしごととわたしたちの暮らし...	27	(20p., 17.2%)	
『わたしたちの峰山町』	3	くらしを守る	47	(13p., 11.2%)	
	4	住みよいくらしをささえる.....	60	(15p., 12.9%)	
	5	きょうどにつたわるねがい.....	75	(28p., 24.1%)	
	6	わたしたちの京都府.....	103	(14p., 12.1%)	
	2002	A4/横組	66	白黒	4
大宮町	1	みんなでつくるまち.....	1	(8p., 12.1%)	
	2	わたしたちの町のようす.....	9	(10p., 15.2%)	
『わたしたちの大宮町』	3	わたしたちのくらしと商店.....	19	(5p., 7.6%)	
	4	わたしたちのくらしとものをつくるしごと	24	(15p., 22.7%)	
	5	住みよいくらしをささえる.....	39	(10p., 15.2%)	
	6	安全なくらしを守る.....	49	(9p., 13.6%)	
	7	きょう土をひらく.....	58	(9p., 13.6%)	
	2002	A4/横組	82	白黒	16
網野町	1	わたしたちのまち みんなのまち.....	1	(20p., 24.4%)	
	2	人々の仕事とわたしたちのくらし.....	21	(17p., 20.7%)	
『わたしたちの網野町』	3	くらしをまもる	38	(6p., 7.3%)	
	4	住みよいくらしをささえる.....	44	(9p., 11.0%)	
	5	きょうどに伝わるねがい.....	53	(13p., 15.9%)	
	6	わたしたちの京都府.....	66	(17p., 20.7%)	
	2003	A4/横組	67	白黒	8
丹後町	1	わたしたちのまち みんなのまち.....	1	(17p., 25.4%)	
	2	人びとのしごととわたしたちのくらし.....	18	(12p., 17.9%)	
『わたしたちの丹後町』	3	くらしをまもる	30	(9p., 13.4%)	
	4	住みよいくらしをささえる.....	39	(10p., 14.9%)	
	5	きょう土につたわるねがい.....	49	(9p., 13.4%)	
	6	わたしたちの京都府.....	58	(10p., 14.9%)	
	2003	B5/横組	119	白黒	8
弥栄町	1	わたしたちのまち みんなのまち.....	1	(33p., 27.7%)	
	2	人びとのしごととわたしたちのくらし.....	34	(13p., 10.9%)	
『わたしたちの町・やさか』	3	安全なくらしを守る	47	(12p., 10.1%)	
	4	住みよいくらしをささえる.....	59	(16p., 13.4%)	
	5	きょうどにつたわるねがい.....	75	(24p., 20.2%)	
	6	わたしたちの京都府.....	99	(21p., 17.6%)	

自治体/書名	発行年	判型/割付	総頁数 1)	印刷 2)	編集委員数 3)
	2000	B5/横組	133	白黒	9
久美浜町	《第3学年》				
	1	住みたいまちづくり.....	1	(16p., 12.0%)	
	2	わたしたちの町のようす.....	17	(20p., 15.0%)	
	3	わたしたちのくらしと商店のはたらき.....	37	(10p., 7.5%)	
	4	わたしたちの町でつくり出されるもの....	47	(20p., 15.0%)	
	5	町の人びとのくらしのうつりかわり.....	67	(7p., 5.3%)	
	《第4学年》				
	1	健康な暮らしをささえる.....	74	(14p., 10.5%)	
	2	安全な暮らしをまもる.....	88	(11p., 8.3%)	
	3	わたしたちの京都府.....	99	(25p., 18.8%)	
	4	きょう土をひらく.....	124	(10p., 7.5%)	
	2010	A4/横組	31	白黒	特記なし
京丹後市	1	わたしたちのまちしらべ.....	1	(6p., 19.4%)	
	2	まちではたらく人たち.....	7	(3p., 9.7%)	
	3	安全なくらし.....	10	(4p., 12.9%)	
	4	健康なくらし.....	14	(6p., 19.4%)	
	5	くらしを高めるねがい.....	20	(7p., 22.6%)	
	6	わたしたちの京都府.....	27	(4p., 12.9%)	

(資料) 当該市町の教育委員会が発行した小学校社会科副読本

- 1) ノンブル（頁番号）が添えられた最終頁による。頁番号のない折図は含まない。
- 2) 大多数の頁が印刷されていることを以て、白黒とカラーに区分した。
- 3) 「教育委員会事務局」等の題名によらない委員および顧問を除き、委員長および副委員長を含む。

が瞬時にできるギガスクール時代なので、こうした試みは今後増えていくかもしれない。

地域開発を扱う第5章では、用水に関する説明が皆無に等しく、竹野川の河川改修に力点を置いた記述が特徴的である。河川改修は旧網野町での扱いと同様に洪水対策事業として取り上げられている。河川に関わる事物として町内有数の河川橋梁である和田野橋を扱っていることは、別稿（香川：2025a）で触れた木津川市の泉大橋を想起させるものがある。橋梁は地域結合や地域交流への影響が大きい建造物なので副読本で扱うことは大きな意義がある。

(6) 旧久美浜町の副読本の特徴

旧久美浜町の副読本『わたしたちのまち 久美浜町』の表紙は、町内で最も広く知られている久美浜湾の湾口部の特色ある地形が斜め空中写真として一面に配置されている。旧丹後町の浜詰海岸から伸びる砂浜海岸は格好の海水浴場となっており、表紙写真にもその白砂、青松の海岸線が写っている。また、後述する第4学年の部の第4章「きょう土をひらく」でも触れられる久美浜湾と日本海を繋ぐ水戸口も写真で確認できるような工夫が施されている。

この副読本を大きく特徴付けているのは、第3学年の部と第4学年の部の各々に第1章から章番号が付けられていることである。これは合併前自治体において旧久美浜町だけにみられる独特の方法である。うち本章で注目している地域開発関係の章は、上述したように第4学年の部の第4章にある。他方、京都府全域を扱う第3章はその前にある。このように市町村と都道府県の記述順序が逆になっているケースは全国の副読本を網羅的に精査しても多くはないと思われる。本格的な地形図（1/50,000 折図）を含めて地図類はかなり豊富で、このことも全国的

にみて珍しい。

第4学年の部の第4章「きょう土をひらく」は3節からなり、うち1節が農業水利関係、2節が久美浜湾の航路、3節が農業開発関係である。各節の分量をみると1節と3節が3頁、2節が4頁あり、同地にとって久美浜湾と日本海とのアクセス、久美浜湾の洪水対策がいかに大切かをうかがい知ることができる。全体として133頁に及ぶ副読本は、かなりのボリューム感がある。

(7) 京丹後市の副読本の特徴

本節で扱う京丹後市の副読本『わたしたちの きょうたんご』は、自治体合併後の初版副読本が入手できなかったため、改訂版の副読本を以て概略を述べる。サイズは大判化されてA4判となり、印刷はオールカラーである。なお、初版刊行は2007年、その改訂版は2010年まで毎年版を重ねて刊行された。本研究で使用したのは改訂版の2010年発行のものである。京丹後市教育委員会によれば、表紙デザインや内容について初版と改訂版の間で大差はないとのことである。改訂版の表紙は薄黄をベースに、自治体合併前の旧6町各地の自然・農業・文化をコラージュ的に散りばめたデザインで、図2には載せていない裏表紙には、頭を垂れた収穫前の稲穂の写真があしらわれている。

注目できるのは、旧6町いずれの副読本と比べても頁数が大幅に削減されたことである。副読本の総頁数は僅か31頁であり、この数値は全国に数ある副読本を一瞥して最も少ないグループに入るのが確実ではないかと思われる。内容構成では思い切ったビジュアル化が図られており、文字数は少なく写真が多い。取り上げられている対象は、合併前6町への配慮が行き届いており、取り上げる対象に地域的偏在が生じないよう配慮している工夫を随所に認めることができる。

旧6町への万遍ない目配せと併せて、この副読本の冒頭には新しい自治体としての一体感を高めるための工夫が施されている。それは、目次の横には標語のように配置された「ひと みず みどり れきし と 文化がおこなすこうりゅうのまち」という記載である。京都府全域を扱う第6章を除いた5つの章が標語的記載のうちのいずれに該当するのかが整理されている。「ひと」には第2章と第3章、「みず・みどり」には第4章、「れきしと文化」に第1章と第5章が対照されている。このあたりの工夫は、新しい自治体としての京丹後市が地域学習で域内交流を希求していることの証左であろう。

地域開発に関わる第5章には「くらしを高めるねがい」という従来になかった章題が付けられた。ここでは文字による説明は大幅に省かれており、市内全域の地図に旧6町の副読本で扱われていた代表的な事物が写真で掲載されている。用水路2件（丹波用水：旧峰山町、尾和用水：旧丹後町）、ため池（旧大宮町）、新田開発（正法寺岡新田：旧網野町）、河川改修（竹野川：旧弥栄町）、汐止め（旧久美浜町）で旧町ごとに1件ずつである。ただ、各々の事物には旧町名が添えられていないため、これらの位置を中学年児童が認識するのはかなり難しいと思われる。旧町名を添えられていないのは、合併後自治体としての京丹後市が一体感を増幅する狙いを持っていたのかもしれない一方、分布が不明瞭であるとの否定的な見方も学校教育現場にはあったらしい。この点を改善するため、表紙デザインが一新された2011年版の副読本では、各々の掲出事物について旧町名が添えられるようになった。

4. 地域性が色濃い章にみる副読本記載内容の「選択と強調」—むすびに代えて—

前章（7）に記したように、京丹後市の誕生に伴い発行された副読本の特徴を簡潔に記せば、①大判化、②カラー化、③ビジュアル化、④スリム化、⑤方法知指向ということになるだろう。

上のうち、①は判型がA4判となることでB5判（旧峰山町・旧弥栄町・旧久美浜町はB5判）よりも1頁あたりの情報量を増やして④のスリム化に貢献した。②は近年の各自治体の副読本では普遍的にみられることながら、自治体合併前の旧6町の副読本が白黒印刷を主としていたことからすれば、かなり刷新的だといえよう。③は説明的な文字数を極力減らして中学年児童の発達段階に寄り添った英断であると評価できる一方、副読本を使う教員にとっては写真解説に要する事実確認などの負担は決して軽いはずである。教材準備や授業設計が不十分でもビジュアル教材ゆえに相応の授業実践は可能だと思われるが、上質な授業実践のためには相応の力量を備えた教員でない限り、ビジュアル教材は第一印象ほど簡単に使いこなせない難物でもある。

また、④は上述の①とも関係しているが、大判化しても記載事項が多ければ頁数の嵩増しは避けられない。事実、別稿（香川：2025a）で論じた木津川市の副読本『わたしたちの木津川市』（木津川市教育委員会：2008）の事例では、自治体発足直後の副読本の総頁数が京丹後市の場合の約5倍相当の159頁にも及んでいる。スリム化を果たした副読本、詳しい解説を伴う逆コン

表2 郷土の歴史に関連させた地域開発にかかわる学習内容の構成要素（要素の点数）

書 籍 名 称	章および節のタイトル	頁数	地図	絵画 略図	写真	年表
『わたしたちの峰山町』 2003年、B5判	第5章 きょうどにつたわるねがい	pp.75-102		(非 集計)		
	1 丹波にある用水路	pp.75-76				
	2 丹後ちりめんと森田治郎兵衛	pp.77-78	0	1	7	0
	3 きょうどの教育につくした中西良蔵	p.79				
『わたしたちの大宮町』 2002年、A4判	第7章 きょう土をひらく	pp.58-65		(非 集計)		
	1 ため池と用水路	pp.58-64				
	2 竹野川改修	p.65	2	1	2	0
『わたしたちの網野町』 2002年、A4判	第5章 きょうどにつたわるねがい	pp.53-65		(非 集計)		
	1 きょうどをひらく	pp.53-58	4	1	10	0
『わたしたちの丹後町』 2003年、A4判	第5章 きょうどにつたわるねがい	pp.49-57		(非 集計)		
	1 尾和用水ができるまで	pp.49-51				
	2 尾和用水ができて	p.52	1	0	3	0
『わたしたちの町・やさか』 2003年、B5判	第5章 きょうどにつたわるねがい	pp.76-98		(非 集計)		
	1 きょうどをひらく	pp.76-79	0	0	7	1
『わたしたちのまち 久美浜町』 2000年、B5判	第4章(4年の部) きょう土を開く	pp.124-133		(非 集計)		
	1 ため池と用水	pp.124-126				
	2 水戸口を開く	pp.127-130	0	0	7	1
『わたしたちの きょうたんご』 2010年(初版2007年)、A4判	第5章 暮らしを高めるねがい	pp.20-26		(非 集計)		
	2 きょう土に伝わるねがい	pp.21-22	1	0	6	0

(資料) 各自治体の教育委員会が発行した小学校社会科副読本の合併前最終版、合併（京丹後市）の改訂版。

セプトの副読本を比べていずれが優れているのかは、各々の副読本の目標や自治体の諸事情が異なるため安易な判断は避けるべきである。しかし、スリムな副読本が方法知重視で編まれ、詳しい解説を伴う副読本が内容知重視であることに疑いを挟む余地はない。この点に関しては、池（2007）のように副読本が各地で内容知重視から方法知重視へ変化しつつあることについての懸念も表明されている。

こうして京丹後市の誕生とともに副読本の性格は一変した。自治体合併が3郡6町に及んだため、各々の旧町が編んでいた副読本のエッセンスを選択するにも調整作業が難航するのは必至であっただろう。そのため京丹後市（2010）の副読本には、奥付の頁に「主な資料提供・協力機関」の名称が列記されているものの、編集者として京丹後市社会科副読本編集委員会と記されているだけで、個々の委員は顕名で列記されていない。このことは、同編集委員会が全体像や骨子を設計し、そこに記事や写真の選択を重ねていく手法で副読本が編まれていった過程をうかがわせる。つまり、旧町それぞれの個性は希釈され、新しくできた京丹後市全体としてのまとまりが希求されたと判断できよう。限られたスペースの中で選ばれる写真は、事物にせよ行事にせよ各々の旧町から項目ごとに1点のみで統一されている。これが前章(7)に記した「地域的偏在が生じないよう配慮している工夫」である。

そこで本章の章題となっている地域性が著しく滲出する「地域開発を扱った章」の状況に焦点を当ててみたい。表2をみると、旧6町と京丹後市それぞれの副読本における地域開発関係の章は、章構成が独特な旧大宮町と旧久美浜町を除いて第5章に配置されている。旧6町の時代では、各町の副読本編集方針が個性的であることが一目でわかる。旧6町の頃の副読本において、地域開発とは農業水利と河川改修（洪水対策）であるといっても過言ではない。

この「農業水利と河川改修」という地域開発が、いわば京丹後市の全域に共通する「くらしを高める」（京丹後市の副読本における第5章の章題の一部）要素として選択の対象となり、厳選された要素が各々の旧町を代表する象徴事物となって副読本に掲出される。京丹後市教育委員会（2010）『わたしたちの きょうたんご』における第5章をみても、市域全体の地図に重ねて旧町から1件ずつの写真が配置されるに過ぎない。なお、その詳しい内容は前章(7)に記したとおりである。

こうした大胆な転換は、合併の対象となる自治体が多く、合併範囲が広大であるという地域特性を反映している。それが本誌掲載の別稿（香川：2025a）で扱った1郡（相楽郡）3町でのコンパクトな自治体合併では観察できなかった副読本のダイナミックな変革に結び付いたのだろう。京丹後市の副読本は、版を重ねるにつれて記載内容が充実し、総頁数も徐々に増してきた。市域に散在する各々の旧町ゆかりの事物が、市域内で広く共有されて著名な「郷土の誇り」と化したとき、京丹後市は真の意味で「ひとつの自治体」になれるのだろう。この動きを促進するための地域学習素材として副読本が果たす役割は大きい。

付記

本研究を進めるにあたり、京丹後市教育委員会および京丹後市立図書館（峰山図書館、あみの図書館、大宮図書室、丹後図書室、弥栄図書室、久美浜図書室）のみなさまに大変お世話に

なりました。心より御礼申し上げます。本研究の骨子は、2024年7月7日に龍谷大学深草学舎で開催された日本地域政策学会2024年大会で口頭発表しました。また、本研究の一部には2021～2025年度科学研究費基金（基盤研究（C））「小学校社会科副読本を活用した地理・地理学教育の裾野拡大とボトムアップ」（研究代表者：香川貴志、課題番号：21K01044）を使用しました。上記の口頭発表の際にご意見・質問をいただいたみなさま、座長およびタイムキーパーをはじめ会場でお世話になったみなさまに厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 網野町教育委員会（2002）『わたしたちの網野町』、網野町。
- 池 俊介（2007）「市町村合併に伴う社会科副読本の課題」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』8、pp.1-14.
- 植村善博（2012）「1927年北丹後地震における京丹後市網野町網野区の被害と復興過程」『歴史学部論集』2、pp.1-22.
- 衛藤彬史（2019）「山間部でのICTを活用したボランティア有償運送の導入プロセス」『社会情報学』7（3）、pp.53-62.
- 大宮町教育委員会（2002）『わたしたちの大宮町』、大宮町。
- 香川貴志（2023a）「「海の京都」を巡るための文献研究の記録（第2報）—舞鶴市、宮津市、京丹後市、伊根町—」『京都教育大学環境教育研究年報』31、pp.55-69.
- 香川貴志（2023b）「京都府北部地域の再発見—「海の京都」を巡る2022（令和4）年度「地理学特講」の覚え書き—」『京都教育大学環境教育研究年報』31、pp.71-85.
- 香川貴志（2025a）「自治体合併による小学校社会科副読本の変化（第1報）—京都府木津川市の場合—」『京都教育大学紀要』147、pp.139-154.
- 香川貴志（2025b）「「二十八の瞳」が巡った小豆島での産業学習—2024（令和6）年度「地理学特講」「社会科教育実践演習—地理—」（大学院）の覚え書き、教育現場におけるフィールドワークをめぐる若干の考察を添えて—」『京都教育大学環境教育研究年報』33、pp.61-74.
- 木津川市教育委員会（2008）『わたしたちの木津川市』、木津川市。
- 京丹後市教育委員会（2010）『わたしたちのきょうたんご』、京丹後市。
- 京丹後市教育委員会（2011）『わたしたちのきょうたんご』、京丹後市。
- 久美浜町教育委員会（2000）『わたしたちのまち久美浜町』、久美浜町。
- 国土交通省国土地理院（2025）「全国都道府県別・市町村合併新旧一覧図（京都府）」<https://www.gsi.go.jp/common/000049775.pdf>（2025年4月25日最終閲覧）。
- 小山元孝（2023）「離村集落の文化的歴史的連続性—京都府京丹後市の「消えない村」の事例から—」『日本地域政策研究』31、pp.22-28.
- 坂口慶治（2022）『廃村の研究—産地集落消滅の機構と要因—』、古今書院。
- 坂口慶治（2023）『丹後半島の大集落 木子と駒倉はどのように消滅したか』、古今書院。
- 新子眞佐夫（2010）「京丹後市の公共交通施策にみる路線バス事業への行政の関与」『政策科学』18（1）、pp.37-48.

- 高橋愛典・野木秀康・酒井裕規（2017）「京丹後市の道路公共交通政策—上限 200 円バスからシェアリング・エコノミーへ？—」『商経学叢』 63（3）、pp.419-441.
- 田畑暁生（2013）「丹後半島における地域情報化政策—持続的視点と自治体間連携の必要性—」『社会情報学』 2（2）、pp.67-81.
- 丹後町教育委員会（2003）『私たちの丹後町』、丹後町.
- 友野哲彦（2008）「地域固有資源の経済評価—京丹後市琴引浜を事例に—」『商大論集』 60（1）、pp.41-65.
- 野村 実（2020a）「人口減少社会における次世代型地域交通に関する事例研究—兵庫県丹波市と京都府京丹後市の事例から—」『国際公共経済研究』 27、pp.76-85.
- 野村 実（2020b）「高齢者の移動手段の確保に向けた地域資源の活用と方策—京都府京丹後市における NPO の取り組みから—」『立命館産業社会論集』 56（2）、pp.85-103.
- 峰山町教育委員会（2003）『わたしたちの峰山町』、峰山町.
- 弥栄町教育委員会（2003）『私たちの町・やさか』、弥栄町.